

どれがESD? → → どうすればESD?

ESD活動の場は、家庭、学校、職場、地域など意識さえあれば、すべての場所で行うことができます。まず、地域の未来図を一人一人が描き持ち、それらの思いを地域で育むことが、ESDのスタートです。

下記の例を参考に、考えてみましょう。

A 地域の川の草刈り

内容: 毎年みんなで地域の川をきれいにした。農業、遊び、生活に、関わりのある川だからこそ、ずっと良い状態で守り続けたいと感じた。
参加者: 地域の人

作業の後のこれが
楽しみなんだね。



「地域への愛着」

草刈りを続けることで、子どもたちの遊べる川原になり、景観も美しくなる。災害防止にも繋がる。地域に関わり、地域に愛着を持つことが、地域の絆や思いを深め、継続する力となる。地域への愛着を育む活動は、ESDと言える。

ただし、誰かが仕方なしに川の草刈りをしているだけなら、ESDじゃないよね。



B ごみ拾い

内容: イベントでとりあえずごみ拾いをした。缶やタバコの吸い殻などのごみが目立ちポイ捨てしてはいけないと再認識した。
参加者: イベントに参加した人など

キレイがないよ〜



「元凶を絶つ」

単にごみ拾いだけが目的では、イベントの終了とともに問題意識は低下し、次への活動に繋がらない。「なぜその場所でごみを拾うか」を考え、ごみが無くなる方法を考え、行動していくことがESDと言える。

ごみの原因を探るといろいろな問題が見えてきます。解決策を見つけ、ごみ拾いを減らすことができるとうれいですね。



C 食育

内容: 地域の農産物や加工品を学校給食に利用。授業などで生産現場を体験し、田畑や自然の恵み、作り手の思いなどを体感し、その背景にある地域の歴史なども学んだ。
参加者: 地域生産者、学校関係者など

おいしい!



「つながりを考える」

身近にある「食」を通じて、地域風土や歴史を再認識でき、生産現場を体感することで、食への感謝の気持ちが芽生える。さらに高齢化など多くの課題を抱えている現状を知ることができる。これらの問題を解決するために行動できれば、よりESDである。

ただし、生産者と消費者の交流がなく、ただ地域食材を義務的に給食に使うだけならESDじゃないよね。



D 町おこし

内容: 町を元気にしたいという思いで、他の地域で成功した企画や事業をそのまま取り入れて町おこしイベント実施した。一時的には盛り上がり、集客、経済効果もあったが、次第にどちらも減少していった。
参加者: 地域の行政、企業、人など

なんでこの町に?



「地域を知る」

地域に元々ある素材や、長年に渡って受け継がれてきた文化や風習を活かしたもので町を元気にすることが、持続可能の原点になる。一過性に終わっては本当の「町おこし」とは言えない。その地域の人が長く楽しく関わられるもの、次代に受け渡したいものを育むことになれば、ESDと言える。

地域の元気は地域の人で! 自分たちの町を好きになることはESDですね。



ESD (持続可能な開発のための教育) は、世界の人たちやこれから生まれる人たちのことも視野に入れ、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、地球や地域のために自ら社会を変えようと行動する人づくりです。

まずは、地域への参画から始めませんか。地域づくりに関わる中で、地域への愛着やこだわり、人と人との絆、より広い社会との関わりも見えてくるのではないのでしょうか。